

随 筆

写真を読む = 相野正人さんのこと =

田岡 俊昭

本年（2016年）の日本医学放射線学会秋季臨床大会の特別企画で、僭越ながら写真に関する話しをさせていただく機会をいただきました。もちろん私の本職は画像診断医であり、写真はあくまで楽しみにすぎないのですが、セッションを構成された藤田保健衛生大学の片田和広教授、そして大会長である聖マリアンナ医科大学の中島康雄教授のおかげをもちまして、思いがけず趣味の話を片田和広教授と大阪市大の三木幸雄教授と共に学会の皆様の前でさせていただくという事になりました。心より感謝いたします。

1980年代、中高生男子がカメラを持つきっかけは3つあると言われていました。鉄道、アイドル、天体です。私は天体写真が撮りたくて写真を始め、高校、大学と写真部で白黒写真の撮影、現像、焼付を楽しみました。大量の写真を撮る写真部の学生にとって、白黒フィルムでも出費はばかにならず、一つずつ箱に入ったフィルムではなく、缶入りの割安な100フィートのフィルムを買ってきて、自分でパトローネに詰めて使っていました。暗室作業は実に奥が深く、温度と時間の設定によって目的とする画質を得られるように上達していくことが喜びでした。写真を撮る時点で、暗室でどのような処理をするかを考えておくようにするとよい結果が得られたものです。興福寺薪能を撮ったこの写真も、撮影の段階で絞り二段分の増感現像をすることに決めていました¹。医学部5年生では写真部の主将として西日本医科学生写真連盟展（西医展）を主管しましたが、OBの河田良唯先生のお骨折りで、審査員は大和路の写真で有名な入江泰吉先生にお願いすることができました²。

そのような5年生の頃に、写真部の友人の小林君に連れられて大阪の心斎橋周防町にあるピクチャーフォトスペースという写真専門の商業ギャラリーにはじめてお邪魔しました。現在でも写真専門のギャラリーは少ないですが、当時は非常に珍しく、おっかなびっくりの訪問でした。そのギャラリーを主宰していたのは相野正人さんという謎の人でした。トレードマークの丸眼鏡とマッシュルームカット、私たちとそんなに年齢は離れていなかったと思います。写真に関しては気さくに色々の事を教えてくれるのですが、自分については語ら

1



2



ない人で、本当の年齢や経歴などは謎のままです。ギャラリー主催のワークショップに参加すると、私がそれまで会ったことのなかった、写真をアートとして鑑賞することを楽しむ人々が和やかに談笑しており、何も知識のない私はその輪の中に入れずにおりました。めげずにギャラリーに行く度に、相野さんは待ってましたとばかりに、様々な写真家の系譜を、たとえば画家の系譜と同様に教えてくれました。私には初めてきく話ばかりであり、そんなに深い世界があるのかと引き込まれていきました。

以下、相野さんの受け売りで、近代写真史のまとめです。まず、道具から眺めると、写真の黎明期である19世紀初頭に用いられたカメラはダゲレオタイプやカロタイプといった湿板を用いた物であり、感度も低く、スタジオでの肖像の撮影に用いられることが一般的でした。イギリスの医師であるマドックスによって乾板が発明されたのは1871年ですが、本格的にカメラが可搬化するのには幅6cmのロールフィルムを用いた1880年代のコダックのフィルムカメラからです。さらにカメラに決定的な機動性を与えたのは1925年のライカの登場といえます。戦後、一眼レフの登場以降、日本のカメラが世界を席卷したことは我々の世代も目撃したことです。

つづいて芸術としての写真の歴史ですが、端的に言うとは絵画史が数百年かかったことをほぼ百年でたどったといえます。19世紀後半の芸術写真の風潮は後年ピクトリアリズム（絵画主義）と呼ばれています。絵画的な写真を求め、芸術としての写真を目指す写真家によって始められた運動で、同時代絵画諸派の様式に追従しています。例えばアルヴィン・ラングダン・コバーンのこの写真³はモネの「印象・日の出」を想起させる物です。その後1910年頃からストレートフォトグラフィーという流れが出てきます。ピクトリアリズムを絵画の模倣にすぎないと否定し、カメラの本来の機能と印画の独自の質を生かした表現を目指す思想で、演出や合成などを用いず、あるがままの風景や人物を表現する様式です。このストレートフォトグラフィー派の写真家として日本でも有名なのはヨセミテ⁴などの作品で知られるアンセル・アダムスです。また、「決定的瞬間」で有名なアンリ・カルチュ・ブレッソン⁵もこの運動を牽引していました。一方、ほぼ同時期の主にヨーロッパではモダニズムという流れが出てきます。アバンギャルド、シュルレアリスムなどの動きと連動して、写真独自の技巧であるフォトグラム、フォトモンタージュ、ソラリゼーションなどの技法を用いた前衛的な写真が発表されました。代表的な作家としてはマン・レイ⁶が知られています。第二次世界大戦頃からは、時代を反映してルポルタージュ・フォト（報道写真）が支持されるようになりました。1936年の雑誌ライ

3



4



5



6



フの創刊や1947年のマグナム・フォトという報道写真家集団の設立を経て、現在に至るまで報道写真は写真史における重要な位置を占めています。しかし、1960年代頃からは「報道写真がもっとも優れている」という神話が崩れ始め、様々な表現方法が出現しました。それ以降の、現代のアートとしての写真は多種多様であり、現代美術と同様、一定の傾向でくることができなくなっています。

このように行ったり来たりの写真史を、相野さんは軽妙で早口の大阪弁で教えてくれました。最初は植田正治やユージン・スミス⁷といった、わかりやすく、親しみやすい写真家の作品を見せてくれましたが、単純に美しい写真の方向にはアンセル・アダムス止まりで、それよりもアウグスト・ザンダー⁸のように「人」と正面から向き合った写真をよく見せてくれました。後年、鬼海弘雄⁹の写真が気になるようになったのもその時の影響かもしれません。はじめてのRSNAの前に、シカゴに行く事をお話しすると、それならと石元泰博の「シカゴ・シカゴ」¹⁰を見せてくれました。当時は何がいいのかわかりませんでした。いま見直すと骨太の構成美が理解できるような気がします。何度もギャラリーに通ううちに、ロバート・メイプルソープ¹¹やダイアン・アーバス¹²、ジョエル・ピーター・ワイトキン¹³といった、異端の、怖い様な写真家の世界ものぞかせてくれました。音楽でいうとショスタコビッチのような「キモ美しい」(気持ち悪いけど美しい)世界です。嫌悪を覚えるような写真も、相野さんが教えてくれる背景と共に眺めていると、作家達がそれらの写真を世に出した必然性のようなものが感じられるような気がしました。余談ながら、上記のジョエル・ピーター・ワイトキンに関しては、2016年の金沢での神経放射線ワークショップでUCLAのサロモン典子先生とお話ししたおりに、彼の最も有名なこの写真¹⁴の主題である「花瓶」はサロモン夫妻によって準備されたものであることを聞き、心底驚きました。

研修医になって、確か月13万円くらいの研修医手当をもらうようになってしばらくして、大好きな植田正治の「桜の枝を持つ少年¹⁵」のオリジナルプリントが相野さんのギャラリーにやってきました。作者自身が焼き付けたプリントです。25万円、研修医にはかなり厳しい出費でしたが、オリジナルプリントは一期一会のものなので、思い切りました。ギャラリーに何度も何度もお邪魔して、いろいろ教えてもらって、それが唯一の買い物です。(10年ほどして相野さんから、ある展覧会の案内と共に、そのオリジナルプリントが購入時の6倍以上の評価額となっていることを教えてもらいました。投資のつもりで買ったのではありませんが、どうやらそういうものようです。)

7



8



9



10



11



12



13



14



15



今回の秋季大会で写真の話をさせていただくにあたって、たいした写真が撮れていない私は、写真鑑賞の話しをしようと考え、久しぶりに相野さんに色々教えてもらおうと思ってメールを出しましたが、返事が来ません。あれっ!?! と思いネットを検索して、須藤さんという写真家のフェイスブックページで相野さんがこの1月に亡くなったことを知り、自分でも思いがけないほどのショックでした。事情を知りたくて小林君にきいたり、学生のころ関西医大の写真部にいて今は写真ギャラリー¹⁶を主宰されている野村ヨシノリ氏を訪ねたりして、早すぎる晩年の様子がわかってきました。膀胱癌だったとのこと、最近ではギャラリーをほとんどあけていなかったこと、亡くなる数ヶ月前のART-OSAKA というイベントでは、抜けた髪を隠すためか帽子をかぶり、すっかりやせて立つことができず、ソファに座ったままで、それでも語り口は以前と同様というよりは、以前にもまして早口で、エネルギーに展示作品について語っておられたとのこと、相野さんの膨大かつ貴重な写真のプライベートコレクションはまだ行き先が決まっていないことなど。

学生時代に相野さんに見せてもらった写真は、嫌悪を催すような写真達もふくめて、ある意味、知の冒険でした。それは読書に似た体験であり、相野さんは深く洞察に満ちた、写真の「読み手」にして私たちの先達でした。「アウグスト・ザンダーの写真集を見ると疲れるでしょ？ 多分同じ人数の人と会って話すのと同じ経験なんです。」という相野さんの言葉を、いま唐突に思い出しました。心斎橋筋の相野さんのギャラリーに満ちていたサロンのような雰囲気は20世紀末～21世紀初頭の大阪の文化の一部であったと信じています。ああ、本当に惜しいです。あまり知られることのない大阪の宝でした¹⁷。

合掌

(名古屋大学附属病院放射線科准教授)

16



17

